

# 心の復興を支える アーク・ノヴァ

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をにう子どもたちへ

日本文教出版



3.11直後。

「スイスにいる私たちにできることは？」  
それは1本の電話から始まった。



梶本真秀 (かじもと・まさひで)  
KAJIMOTO代表取締役社長

1951年、兵庫県に生まれる。1975年、マサチューセッツ州クラーク大学卒業。ポピュラー音楽の仕事に携わった後、梶本音楽事務所に入社。1992年、代表取締役社長に就任。2009年、社名を梶本音楽事務所からKAJIMOTOに変更。海外のトップ・アーティスト、アンサンブル、オーケストラなどを招聘するとともに、数多くの優れた日本の演奏家を国内外に広く紹介している。また、日本最大のクラシック音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」を全国で展開。2001年、フランス共和国芸術文化勲章オフィシエ受章。

仙台フィルの演奏に合わせて風船が舞う。

## ■ルツェルン・フェスティバル

スイス中部に位置するルツェルン湖畔の都・ルツェルンで開催されている伝統の音楽祭。ワーグナーやラフマニノフが暮らしたことで知られるルツェルンで1938年に始まり、今では年間で10万人を超える観客が訪れる。2001年に正式に「ルツェルン・フェスティバル」と改名。春のイースター音楽祭“OSTERN”、夏の音楽祭“SOMMER”、秋のピアノ音楽祭“PIANO”という3つの音楽祭が開催されている。



## ■アーク・ノヴァ

建築家の磯崎新氏と彫刻家のアニッシュ・カプーア氏の協働によって生み出された、高さ18m、幅30m、長さ36mの可動式コンサートホール「アーク・ノヴァ (Ark Nova)」。ラテン語で『新しい方舟』という意。空気で膨らむ風船構造で、膜は厚さ1mm未満のPVCコーティングポリエステル繊維。2時間ほどの送風でドームとして立ち上がる。この画期的な構造が、被災地を巡る移動式コンサートホールというアイデアを可能にしている。

2014年11月、仙台市内の空き地に、突然巨大なドームが現れた。薄い膜の内部からは仙台フィルハーモニー管弦楽団の奏でる調べが聞こえてくる。風船にも似たこのドームは、なんと移動可能なコンサートホールなのだ。

『アーク・ノヴァ』と名付けられたこのホールは、伝統あるスイスの音楽祭「ルツェルン・フェスティバル」による復興支援策として設計・建築された。東日本大震災からの復興の一助として、被災地に音楽を届けたい。そんな思いが大きく膨らみ、形になった。

この一連のプロジェクトの実行委員長として企画制作に携わってきたのは、KAJIMOTOの梶本真秀社長だ。同社は戦後まもなくよりクラシック音楽のイベントなどを手がけ、日本の音楽文化を牽引してきた梶本音楽事務所を前身としている。

果たしてこの奇抜とも言える『アーク・ノヴァ』は、いかにして生み出されていったのか。それは1本の電話に端を発する。

2011年3月11日に発生した東日本大震災。その惨状をスイスのメディアで知ったミヒャエル・ヘフリガー氏が

ら、友人である梶本さんに電話がかかってきた。

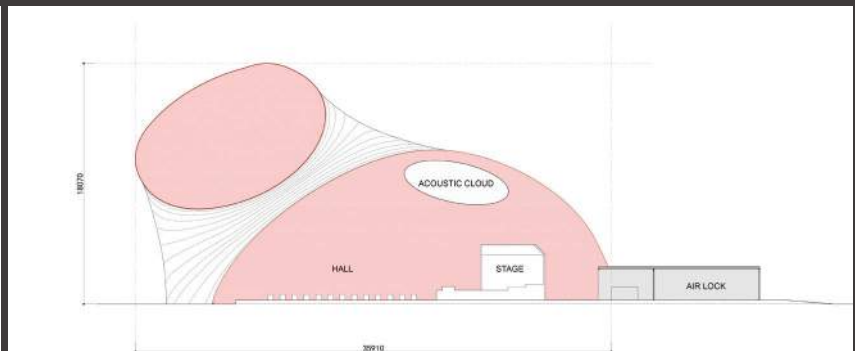
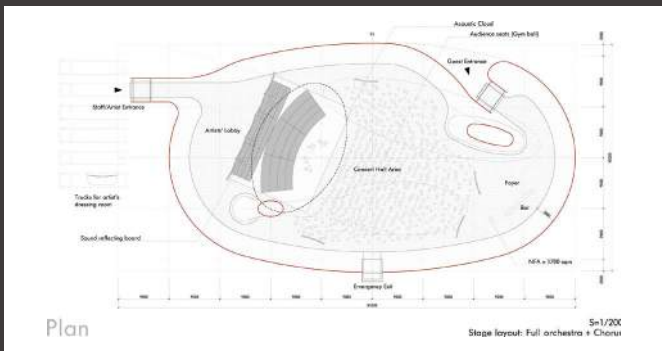
「日本が大変なことになっているとスイスでも早々に報じられたようで、ヘフリガーが『私たちに何かできることはないか？何かしたいんだ』と言ってくれたんです」

ヘフリガー氏はルツェルン・フェスティバル芸術総監督で、それ以外にも多くのイベントに関わってきた人だ。チャリティーコンサートなどの企画はすでに頭にあっただろう。だが梶本さんは「でも、今じゃない」と答えた。

「3.11のような未曾有の災害が起きたとき、まず優先されるべきは『命』ですよね。そして衣食住。音楽や芸術にもできることは必ずあるし、いずれ必要とされる。しかし今はまだ早い。被災された方々に親切を押し付けることになってはいけない。少し待とうと彼に言ったんです」

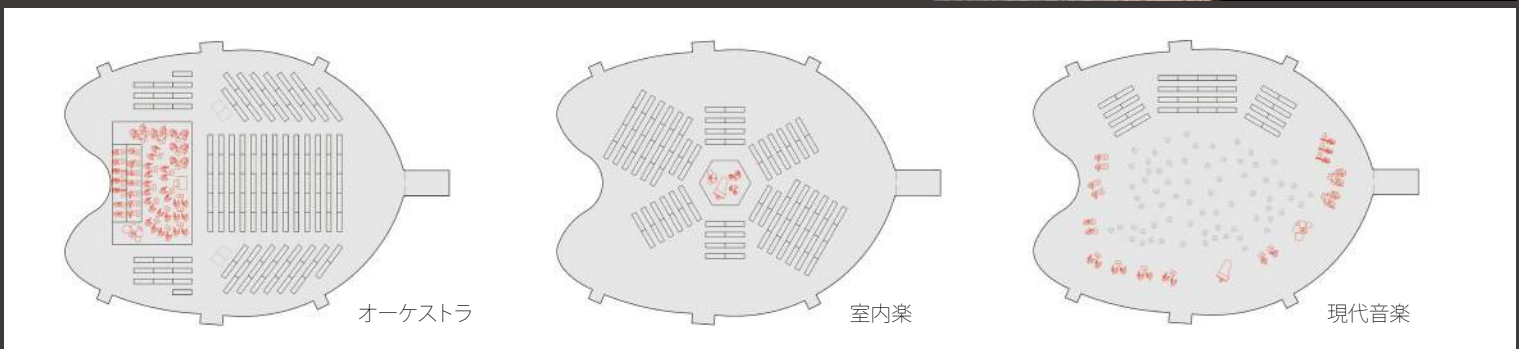
梶本さんが最も力を発揮できるのは「プロデュースすること。すぐに物資を抱えて被災地に飛び、音楽を提供するアーティストのような支援はできない。自分たちができることは何か。1年後、2年後の被災地で求められるものは何か……。梶本さんは音楽という枠を超えて、さまざまな分野の友人・知人と語り合い、煮詰めていった。

「ヘフリガーとの間で、ルツェルン・フェスティバルがこ



■しなやかに順応

上左：アーク・ノヴァ平面図、上右：アーク・ノヴァ断面図、右：構想段階での模型。ホール自体だけでなく、イベントを行うための周囲の環境も想定する。下：約500人収容のホール内はレイアウト自在で、多様なジャンルの公演が可能。ホール内上部には浮き雲のようにヘリウムバルーン照明が浮かべられ、音響のアシスト役も担っている。



このプロジェクトの経済的な支援を行う意向を固める一方、友人で建築家の磯崎新さんが『移動式のホールにしよう』という斬新なアイデアを出してくださいました。被災地では数々の建物が傷付き、使えない状態にあります。それなら自らホールを携えて被災地へと赴けばいい」

移動式ホールのデザインとして磯崎氏が思い浮かべていたのは、彼の親友で彫刻家であるアニッシュ・カプア氏の作品だった。その時カプア氏がパリで展示会を催していると聞いた梶本さんは、すぐさま現地へと飛んだ。

そこで目にしたのは、茄子色のPVC（ポリ塩化ビニル）素材による、大きな風船状のインスタレーション『リヴァイアサン』。聖書に登場する巨大な海の怪物の名を冠した作品だ。回転ドアをくぐってその内部に入ると、薄い膜を透過する陽光が周囲を赤く染め上げていた。

「空間そのものがパワーを持っていましたね。生きていくモチベーションを得られる、そう感じました。家族を失い、街を失ってしまった人たちにも、この感覚を共有してもらえたら……と」

磯崎氏はまた『まればと』というコンセプトも携えていた。まればと（稀人・客人）とは、民俗学者の折口信夫が

「異界からの客人が信仰や祭事をもたらし、社会を活性化させてきた」という概念を表すために用いた言葉だ。移動式のホールでいくつもの被災地を訪れ、芸術を通じて人々の心を癒やしていく。業種の垣根を飛び越えた、そんなプロジェクトの全体像が見えてきた。

文化・精神の長期的な復興に向けて、このプロジェクトは「新しい方舟」＝アーク・ノヴァと名付けられた。

「前例のない移動式ホールということで、実際につくることも、また行政との調整にも苦労しました。無いものをつくるというのは、やはり想像以上に大変でしたね。構造強度の問題、音響の問題、客席の椅子の問題。また雨が降ったら、雷が落ちたらどうなるのか。空気が抜けたときに中の人には逃げられるのかなど、それこそ考えなければならないことは山のようにありました」

しかしそこは各分野の専門家が集まって立ち上げたプロジェクトである。山積されていた課題は一つひとつクリアされていき、そしてついに——2013年9月27日、「ルツェルン・フェスティバルアーク・ノヴァ松島2013」が宮城県松島町の西行戻しの松公園にて開幕された。

ホール内に設置されたベンチは、宮城県石巻市の「石



## ■建築家×彫刻家

### ▶磯崎新 (いそざき・あらた)

建築家。1931年大分県大分市に生まれる。東京大学工学部建築学科卒。同大学院建築学博士課程修了。32歳で磯崎新アトリエを設立。大分県立大分図書館、つくばセンタービル、ロサンゼルス現代美術館など国内外の建築を数多く手がけ、ポストモダン建築を牽引した建築家として知られる。現在は活躍の場を海外に移し、実験的な建築を試みている。日本建築学会賞、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞など受賞歴多数。

### ▶Anish Kapoor (アニッシュ・カプーア)

1954年、インドに生まれ、現在はロンドン在住の現代彫刻家。さまざまな素材や表現方法を用いて、見るものの視覚に強く訴える作品を多く発表している。1990年のヴェネツィア・ビエンナーレではイギリス代表として出展し、2000年賞を受賞。1991年には50歳以下のイギリス人もしくはイギリス在住の美術家に対して贈られるターナー賞を受賞している。日本では金沢21世紀美術館などに作品が所蔵されている。

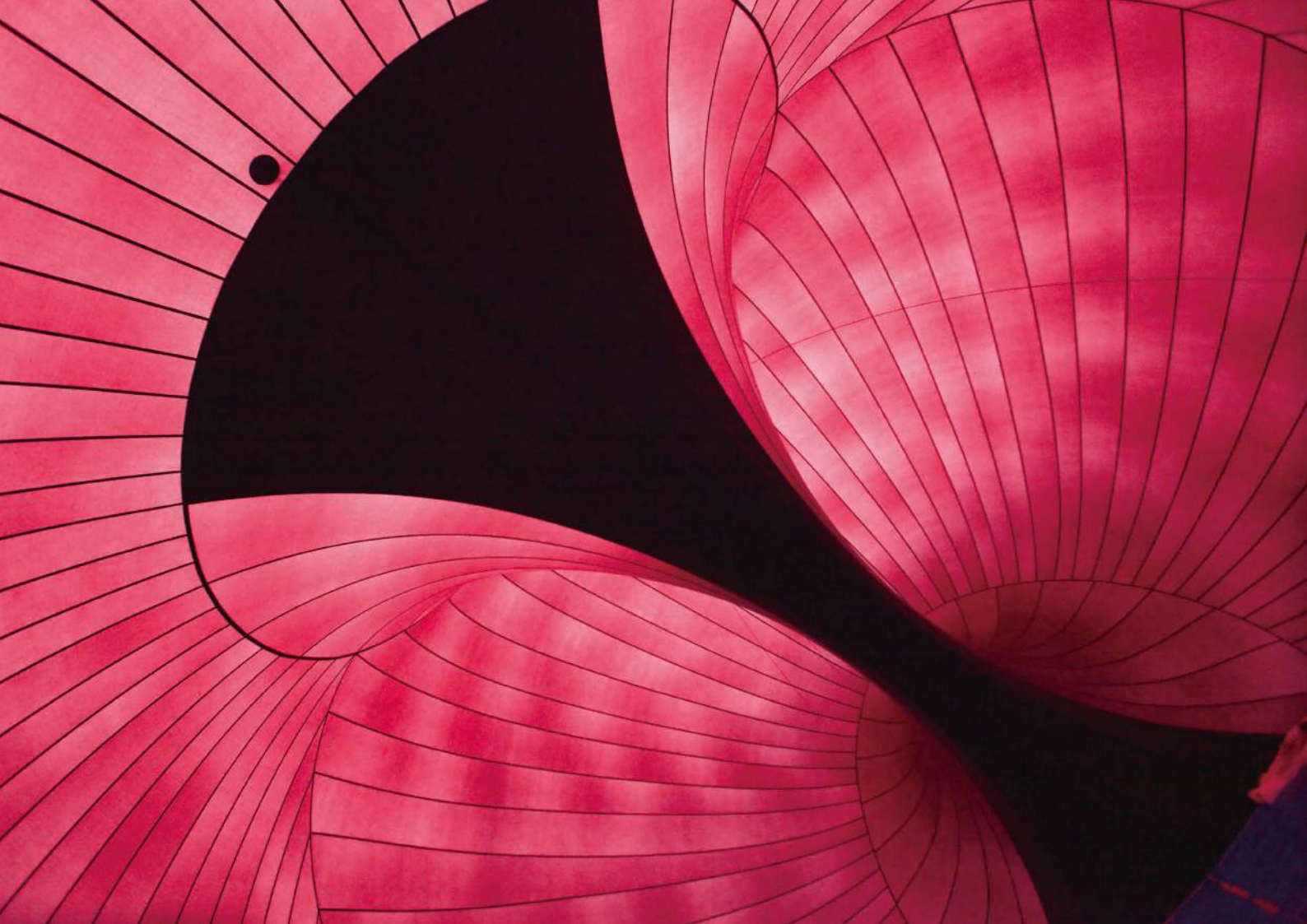
「構造は？」「音響は？」「客席は？」  
「雨が降ったら？」「非常口は？」  
前例はない。問題山積。

巻工房」による監修のもと、市民参加のワークショップによってつくられた。材料の杉材は、津波の塩害と地盤沈下によって立ち枯れし、伐採された瑞巖寺の参道杉。震災の記憶を新たな形で残そうという取り組みだ。

プログラムは、ルツェルン祝祭管弦楽団による弦楽六重奏などクラシックをはじめ、歌舞伎、神楽、狂言、ジャズ、東北の子どもたちで結成された「東北ユースオーケストラ」の演奏、坂本龍一と大友良英（NHKの連続テレビ小説『あまちゃん』の音楽担当などで知られる）の共演など多岐にわたり、来場した地元の人々との交流が進んだことはもちろん、世界的にも注目度の高いイベントとなり、東北と世界とを音楽でつないだ。

翌2014年は「ルツェルン・フェスティバルアーク・ノヴァ 2014 in 仙台」と題し、仙台市内にて開催。前年にも増して豪華な顔ぶれが揃ったほか、「相馬子どもオーケストラ&コーラスによるオープン・リハーサル・コンサート」や「親子で歌うワークショップ」などの教育プログラムも充実し、より地元の人と密につながる構成となった。また最終日の「仙台フィルハーモニー管弦楽団 スペシャル・コンサート」のチケットは早々に完売するなど、大盛況のうちに幕を閉じた。

「たった数年で、すでに震災の風化が言われています。でも『私たちは忘れていませんよ』と、被災された方々に伝えたい。そのためにも現地へ行き、地元の方々と直に触



## 被災地で開催すること。それこそが、 「私たちは震災を忘れていない」 というメッセージ。

れ合うことが大切だと考えています。次回の予定はまだ立っていませんが、『まれびと』として芸術の力で人を癒やそうという初心を忘れず、今後もさまざまな角度から支援を続けていきたいですね」

梶本さんを介して、音楽家、建築家、彫刻家たちが協働して作り上げたアーク・ノヴァ。それぞれの枠を飛び越えて成し遂げたこのプロジェクトは、多くの人の心の支えとなったことだろう。

「松島で開催した2013年。会場に来てくれた子が、じつとアーク・ノヴァの天井を見上げていたんです。『何を見てるの?』と尋ねると『天井がすごく高くて、面白い形をしている』と言いました。さらに『自分の周りでもたくさ

んの人が死んで、毎日ガレキばかり見ていた。だから余計にこの空間が不思議で、楽しい。そして、知らない外国の人たちが自分たちのことを心配して、こうしてここに来てくれたことがとてもうれしい。頑張っていかなきゃと思えるようになった』と話してくれたんです」

やってよかった——。そのとき、梶本さんは確かな手応えを感じたという。

「アーク・ノヴァという極めて独創的な造形作品の中で、音楽をはじめとしたさまざまな芸術を楽しむ。まるでサーカスのように自由に、空間のみを携えて被災地に多様なエンターテインメントを届ける。それが『今』の私たちにできる『何か』だと思うのです」



## 石巻工房の理念。

アーク・ノヴァのためにつくられたベンチには、「ARK NOVA」に並んで「石巻工房」の焼き印が押されている。石巻工房は、震災を背景として設立されたものづくりの場だ。津波の傷跡深い石巻で、復興のために何を形づくるのか。石巻工房・工場長の千葉隆博さんに語っていただいた。

震災当時、津波で破壊されたドアの代用として、流されてきた畳などを利用している家や店舗がたくさんありました。あまりにも被害が広範囲だったため、外部からの支援は追いつかず、住人はどうすることもできずにただ待っていただけでした。

ドアの蝶番の構造を理解していて、なおかつ直し方のスキルを持っていれば、簡易的でも復旧が早く進むのでは……そう考えたことが石巻工房発足につながりました。石巻工房は、被災者自らが手を動かして復旧・復興を進めていく、DIY (Do It Yourself) の場なのです。

アーク・ノヴァのベンチは、当初は単純に工房が製作し、納品するというオファーでした。しかしホールに設置するベンチですから、必要数も多い。我々はものづくりワークショップを多数開催してきた経験もあるので、「ワークショップ形式で製作できれば、地元参加型のイベントとして意義のあるものになるのでは？」と考えました。そうして2013年の8月と9月、松島で「椅子製作ワークショップ」が開催されることになったのです。

ワークショップに参加された方々からは、たとえ塩害によって伐採されてしまった杉材とはいえ、瑞巖寺という馴染み深い場所の杉（言わばご神木）を使うことに対する畏敬の念のようなものを感じました。単に木製のベンチをつくるという趣旨を超えた意義を感じていただけたよ

うです。また「ベンチって自分でつくれるの？」と疑心暗鬼だった方が、自身の手でベンチを完成させたときの驚きと喜びにあふれた表情も印象的でした。

アーク・ノヴァのベンチ以外にも、石巻工房ではさまざまなワークショップを開催しています。ワークショップでは必ず「考えて、つくる」よう伝えています。実のところ、ワークショップ中はあまり親切には教えません。ですから当然失敗する人も多いのですが、ここで重要なのは「なぜ失敗したのかを考える」ことなのです。


技術は練習すれば習得できるものです。しかし、その技術で何ができるのか。「自分のアイデアを形にするにはどうしたらいいのか」を考えてこそ、技術は生きていくのです。ただ待っているのではなく、自ら考えて能動的に動く。石巻工房発足からの変わらぬ理念です。

震災から4年が経ち、被災地観光という言葉が生まれ、被災地を訪れる方も増えています。実際に現地を見て「自分に何ができるだろうか」と思い巡らせることは、とても尊いことです。けれどもそれ以上に、いつでもどこでも起こりうる事故や災害に直面した際、ただ支援を待つのではなく、自分がどう行動すれば生き抜くことができるのかを、一人ひとりの立場で考えることが必要です。石巻工房の活動が、そうした緊急時のあり方について模索するきっかけになればと切に願っています。





スマートフォンやタブレットをかざすと、  
動画が楽しめます！

- 「カザスマート」アプリを立ち上げ、マークがあるページで紙面にかざすと、動画が始まります。



- 専用アプリ「カザスマート」をダウンロード下さい。



資料提供・協力：Lucerne Festival ARK NOVA, 石巻工房

編集協力：有限会社リンカーベル

写真：柳原茂光, 有限会社リンカーベル

## 心の復興を支える アーク・ノヴァ

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成27年(2015年)4月1日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社  
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33269

## 日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690